論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　　第　　号

氏　　名　文　銀実

論　文　題　目

中国朝鮮族の経済発展にともなう国内外への移動と民族社会の再形成
－黒龍江省綏化地区の散居型朝鮮族を研究対象として－

論文審査担当者

主　査	名古屋大学	教授	櫻井龍彦
委員	名古屋大学	教授	内田綾子
委員	名古屋大学	准教授	サヴェリエフ・イゴリ

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

１，本論文の構成と概要

中国少数民族の一つである朝鮮族は、中国国家を構成する他のマイノリティーと比べて極めて異質な民族である。朝鮮半島から中国東北地域への移動と定住の歴史もさることながら、改革開放後の近代化政策の過程で、多くの人びとが国内の沿海部、出身国の韓国や日本などの海外に職を求めて再移住し、東北地域では人口減による民族社会の崩壊という現象がおきている。こうした政治的・経済的変動を捉えてさまざまな分野から朝鮮族社会の変容に関する研究がなされてきた。アイデンティティ論、エスニシティ論、ネットワーク論、オンラインコミュニケーション論、トランスナショナル移民社会論などからのアプローチである。

本論文もこうした系譜に位置づけられる研究であるが、対象としたのが、従来の研究に多い朝鮮族集住地域ではなく、小規模分散型の地域（黒竜江省綏化）であることが特徴の一つである。散居型であるため、延辺のような大規模な集住地域の朝鮮族社会とは移動のあり方も人間関係も異なる。散居という形態の影響でもともとは村人内部での絆や身内意識が強かった人びとが、移住先でさらに同郷としての共同体構成員という価値観を強め、内部結束的な連帯である反面、排他的でもある傾向をもつ社会的関係を形成していく過程を考察している。

本論文は序章、終章をふくめて全体で６章から構成されている。

１)，序章では、研究の背景と目的、意義、研究方法、先行研究、自身がおこなってきた調査の概要などを述べ、論文全体の構成を説明する。

対象としては小規模散居型の地域（黒龍江省綏化市）の朝鮮族を選び、主たる移住先である北京、天津、青島、ソウルを調査地とし、彼らの移動→定着→再移動→再定着の過程で朝鮮族社会がどのように変容し、新しい社会関係を形成しているかを考察することを目的とする。

方法としてライフヒストリーという生活口述史を重視することで、全体的、一般的な統計資料からは読み取れない個々人の生きられた生活世界を把握し、その作業を通して変容する朝鮮族社会の動態に迫ろうとする。

２)，第１章では、朝鮮族の移住史を概観し、綏化農村の成り立ちを論じている。

朝鮮族の移住時期に関する区分はいくつかの考え方があるが、著者は先行研究をふまえた上で、まず大きく満洲国成立以前と成立以降に二分し、前者をさらに日韓併合以前と以降、後者を移民政策計画期、展開期、崩壊期に三分し、それぞれの時期の特徴を述べている。

研究対象とした綏化農村は主に満洲国時代に朝鮮総督府が投資し、東亜勧業株式会社が建設した集落であり、「安全農村」として宣伝されたこと、多くが慶尚北道からの分散移民あるいは政策移民であったことを明らかにしている。

３)，第２章では、改革開放政策と朝鮮族の人口移動との関連を統計資料を駆使してマクロな視点から概観し、移動の結果、東北朝鮮族居住地にどのような社会変容が生じたかという問題と移住先での新たなコミュニティの形成について考察する。

具体的には、1980 年代以降の中国国内での人口移動の要因とそれによる朝鮮族社会の変容を経済状況から説明し、1990 年代以降の国外（韓国）への人口移動を韓国での在外同胞政策の変遷にそって述べ、在韓朝鮮族社会がどのようにして形成されたかを論ずる。またそうした人口移動の結果、東北朝鮮族農村地域に生じた社会変容と移住生活の長期化にともなう新たな社会形成の特徴について、国内

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

では北京と青島、国外では韓国ソウルを事例として詳述している。
４)，第３章では、本論文の事例研究である綏化朝鮮族の移動と定住の歴史と社会変容を個人や家族に寄り添い焦点をあてる生活史のレベルで分析している。
　東北地域の朝鮮族のなかでも綏化が属する黒龍江省の朝鮮族は都市部よりも農村部の人口が多く、収入も相対的に低かった。綏化は黒龍江省のなかでも都市化が遅れ、人口流動も大きい方ではなかったが、1990 年代になり国内外への大移動がはじまった。興和郷は綏化市唯一の朝鮮族郷であり、多くがもと慶尚北道出身者であったため韓国人との血縁関係から韓国への移動が加速した。この興和郷出身者 89 名を対象に聞き取り調査をおこない数値データによって概況を示し、個々のライフヒストリーを集積することで、統計資料には現れてこない個別の事情や生活史に沿った移動の実態を描き出している。
５)，第４章では、前章のライフヒストリーに加えて実施したアンケート調査をふまえ、綏化朝鮮族の移動と再編成について、分析と理論的な考察をおこなっている。
　前章で得た個々のライフヒストリーからもう一度戦前からの朝鮮族移動の歴史に立ち戻って、マクロな歴史事実の中にミクロな個人史をはめ込むことで、移動と定住の歴史を個人の生活レベルとの相関でより有機的に記述している。またこの章では移動にともなう朝鮮族のアイデンティティの変化、教育レベルの変化、職業の変化についてもアンケート結果を加えつつ考察している。移住先での人的ネットワークの特徴としては、綏化朝鮮族の 9 割が慶尚北道の出身なので同郷意識は非常に強いが、人口が少ないため経済力も弱く、朝鮮族集中地域出身者によるネットワークに比べて規模も機能も弱いと指摘している。
６)，終章では、前章までの議論をふまえて総合的な考察をおこない、さらに今後の課題について論じている。
　人口流出が甚だしい綏化朝鮮族の故郷は今後どうなるのか。高齢者を主体に帰国するものが故郷にもう一度定着できるように村の建設がすすんでいる。また今日でも農業以外に生業がない故郷でむしろ朝鮮族の独特な農産物や民族食文化を活かした民族村の構想もあるという。

２，本論文の評価および問題点
　本論文は中国東北地域の朝鮮族の移動の歴史とその要因､経緯などを朝鮮半島から中国への移動（第１章)、改革開放後の中国国内都市部および韓国への移動（第２章）について、各種のデータを利用しその分析によってマクロな視点から考察している。このような考察は国家や社会を総体として見ようとしたとき有効であるが、移動の主体である個々人の具体的な歴史や背景、家族レベルの事情や人びとの思いや願いなど個別かつ多様な要因まで解明することはできない。筆者はマクロな視点からの考察に、ミクロな視点からの生活史を加えることで、世界や国家の動向が個人の人生や一定集団内の社会関係性にあたえた影響を鮮明にしている。これまで朝鮮族の移動や移住先でのネットワーク形成などに関する研究は多くあったが、本論文のように豊富な聞き取り調査で個別の生活史から朝鮮族社会をより多角的、立体的に描き出した研究は少ない。それが民族の移動史を政治的、経済的視点からの一般的な結論ではなく、多様な背景と個々の複雑な事情をもつ生活史として考察した点が特徴といえる。しかし多様性のなかにも分類基準の立て方によっては類型化できるパターンがあるはずなので、

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

そのような共通の枠組みを設けることでまた移動と定住のパターンが見え、研究上の普遍性が志向できるということもあると思われる。

本論文は小規模散居型の地域（綏化市）の朝鮮族を事例としている。比較的人口も多く民族自治権をもつような集住型地域の朝鮮族との比較によって、同じ民族であっても人口移動のあり方や民族社会の変容にどのような相違や特徴があるのかを明らかにするのは重要なテーマである。それについては第 4 章第 4 節および終章において考察があり、たとえばアイデンティティの問題については一般に韓国に移動した朝鮮族は同族でありながら偏見、差別などいろいろな経験を経て中国人としてのアイデンティティを強めるが、綏化朝鮮族は韓国に血縁関係をもつ者がほとんどで先祖の国に親近感をもち韓国との関係を強める傾向にあるという。こういった差異を実証的に論じた点は評価できるところである。

中国語、韓国語、日本語による先行研究を渉猟し、各種統計データによる数値を根拠に定量的に論を展開する一方、聞き取り調査による定性的な事例研究によって数値の背後にある人間生活の具体的な姿を論じている点は方法論的にも相互補完的であり、論自体が厚みを増していて評価できるものである。

ただ民族アイデンティティ、民族教育、ネットワーク形成、コミュニティ形成などにも言及しているが、こうした問題は従来から論じられてきたもので、設定課題としては目新しい部類ではない。また上記したように、多様な事例の中から類型を試み、他の事例と比較できる基準をつくる試みも今後の研究に期待したい。

3，評価結果の判定

上記３名の委員からなる審査委員会は、平成 29 年２月 14 日、本審査委員会を開催し、博士課程（後期課程）のあるべき水準を満たしていて、オリジナルな成果を含んでいることなどを確認・評価した。

よって本論文は博士（学術）の学位に値するものと判断する。